



活字健在

桑野 巍

絶え間なく言葉が空中を飛んでいる時代である。「21世紀は電子回線が張り巡らされた時代なのだ」と誰かがいっていたが、どんな情報や会話が泳いでいるのだろう。その中身は見えない。地球上で一日にどれくらいの量の言葉が飛び交ってるのか、想像もつかないし、考える方がばかばかしいとも思う。

そんな情報洪水の中で、今年ほどメディア、マスコミ、コンテンツ（情報の中身）というカタカナ語やメディア関係経営者の顔が映像や紙面に登場したことは珍しい。こうしたことはメディアの業態やそれを取り巻く環境が一般消費者にわずかでもわかってもらえたとし、幅広に言えば既存の新聞や放送のあり方、ジャーナリズム論にまで及んだのだから、面白く、よしとするべきだろう。

その意味ではNHK関連の問題や堀江貴文氏の騒動は時代変革の貢献者ともいえる。とくに「放送とインターネットとの融合」「民放のコンテンツと公共の電波のあり方」「視聴率がすべての民放」「民放の上品さと下品さ」など放送メディアに対する問題提起の側面も伺えた。

一方、株式資本面でも「自分たちの会社をどう守るのか」という問題が浮かび上がってメディア以外の企業経営者たちを緊張させたりもした。そのせいか企業防衛に取り組むための勉強会が大流行したとも聞いた。たまたま現役記者と懇談する機会があったので、現況を尋ねたら、ベテラン記者の一人が「6月下旬の株主総会の方が面白い」といい「われわれ“勘繰る”という悪いくせがあるでしょう」と前置きして「裏側では海外資本が日本のメディア業界を支配下に置こうとしているのでは」と話し、噂が乱れ飛んでいるという。

そうか、金融業界の次はテレビ・ラジオ業界かと思いつきながらベテラン記者の具体的なマル秘の話の耳にしたが、「まさか」という話も出たので、失礼ながら眉に唾をつける仕種をしたら彼は「当るも八卦、当らぬも八卦と思って下さい」と極めて冷静だった。そのあと彼は「NHK以外の多くの民放メディアは公共性の幻想から抜けられず、本来の存在意義を損

ないかねない行動があったかも」と反省の弁も忘れなかった。当方眉に唾をつける格好をカムフラージュするため「メディア業界のこれからの十年」を聞いたら、ベテラン記者の答は「具体的には読めず、未知との遭遇でしょう」で名答案だった。

そのあと若い記者から「先輩たちの世代は活字文化、それはもう古いですよ」といわれてがっかりした。「いまの時代は行間を読む必要はないのです。映像とインターネットのコンテンツで十分です」といわれて二度目のがっかり、時代遅れを痛感した。しかし、胸の内では「まだまだ活字と紙面は健在」と反論したい気持ちでいっぱいだった。

若い記者諸君との懇談は実になることが多く、新鮮さを注入してくれる—そんな余韻を引きずっていた時、新聞協会報（日本新聞協会発行）の記事「コラムの読み方12か条」が目にとまった。米紙ニューヨークタイムズ紙の名物コラムニストが今年1月、30年以上のコラム生活を終え、12か条を書いたというのだ。耳に痛い項目を紹介しよう。

1. 保守主義的な主張をするためにリベラルな論者からの引用を使う手口にご用心。
2. リードにニュースがあると思うな。
3. メディア業界通を気取った書き方には乗せられるな。
4. 挑発的なコラムに激高しても、怒り狂ってメールするな。
5. 長広舌で格好をつけた文章にだまされるな。
6. ささいな誤りの告白にご用心。
7. 好意の代価に気をつけろ。
8. 二つのテーマを扱うコラムは読むべからず。
9. 情報源を探せ。
10. 知的ぶった書き方に抵抗せよ。
11. 予期せぬ変化球にだまされるな。
12. コラムニスト同士の個人的やりとりを軽蔑せよ。

コラムは甘口、辛口いろいろだがよく読まれる。活字は健在、粗末にできない。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）